

保育は深く面白い ～一生懸命生きる子どもと共に～

講師

中西 昌子 京都市教育委員会指導部学校指導課参与

1. はじめに

私は、10年間の小学校教師生活を経て、念願の幼稚園教諭になりました。もう40年も前ですが、小学校の在任中は、“幼・保の育ちや学びに関心を持とうとする文化がないなあ”と感じていました。幼稚園教諭となり、公立13年、国立6年の保育実践の時間を過ごし、教育委員会に参りました。今は幼稚園の園内研修の仕事もしています。教育委員会にいても、“幼児教育というものはなかなか理解されていないんだなあ”と思うことがありましたが、それは言い換えれば、発信不足ということでもあります。

平成29年度に、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の内容に整合性が図られました。また、小学校学習指導要領の総則にスタートカリキュラムが明記され、生活科だけでなく、全教科、全校体制でスタートカリキュラムを実施するということになり“幼児教育・保育の重要性をわかってもらえるチャンスの時が来た！”と思いました。この間、私は“自分にできることってなんだろう”と考え、「遊びが大事なんです」「幼児期の発達は小学校とは違うんです」とさまざまなところで伝えてきましたが、なかなか理解してもらえません。

そこで、“発信が足りない”“幼児教育・保育は大事だと思ってもらえるようにしなくてはいけない”と反省し、『幼分補給』というコラムを書き、教育委員会内で発信し始めました。幼児の可愛さ、面白さ、素晴らしさ、一生懸命に生きている姿、遊びの大切さを伝え、「幼児期の発達にふさわしい保育を！」と発信したこの『幼分補給』が、周りからの後押しもあり『保育は深く面白い～「一生懸命生きる子ども」と共に～』と名前を

変えて、日本教育新聞に連載されることになりました。教育委員会内や他都市からもさまざまな反響があり、今回も話すチャンスをいただきました。

2. 幼児教育・保育の重要性と幼保小接続の重要性

私の実践のフィールドは教育委員会や幼稚園ということで、3歳児からの幼児期に偏ったお話になることをご了承ください。

世界的な研究によって、より良い人生を送るために、社会情動的スキル(非認知能力)が非常に大切である、ということがわかり注目を集めました。社会情動的スキル(目標の達成、他者との協働、情動の制御など)は、学びに向かう力とも言い換えられる心の育ちで、認知的スキル(基礎的認知能力、獲得された知識、外挿された知識など)は、狭い意味での学力と言えるでしょう。この二つは、相互に影響を与え合っており、社会情動的スキルを先に身に付けると認知的スキルは伸びる、けれど、認知的スキルを先に学んでも社会情動的スキルが伸びるという根拠は何も得られなかった、ということでした。これを踏まえ、平成29年度の改訂では、小学校以降の学習指導要領でもこの社会情動的スキルが重要視され、3本柱のうちの1本『学びに向かう力・人間性等』となりました。

また、カリキュラムの研究から見ると、ディスターモデル(知的能力を高める事だけを目的としたカリキュラム)においては、幼児期における知的指数の上昇とその後の下降、及び15歳時点の反社会的行動の回数が他のプログラムと比較すると2倍となって現れました。幼児期には、主体的・意欲的な遊びを通して学ぶカリキュラムが、非常に質の高い効果的なカリキュラムであり、その効果が持続するということがわかりました。つ

まり、幼児期に育むべきことは、人と共に生きるために必要な社会情動的スキルであり、子どもが主体的に環境に関わり、仲間と共に遊びに熱中するよう促す教育方法が効果的だという知見が得られています。幼児期に子どもが主体的に熱中して遊ぶ質の高い保育を保障し、その育ちを生かす小学校以上の教育への接続が重要だということがわかったのです。

そこで、さまざまに議論され、今年度から新たに始まった調査研究が、幼保小の接続を重要視した『幼保小の架け橋プログラム』です。5歳児と1年生の2年間で架け橋期と名付け、架け橋期のカリキュラムの作成と共に、幼保小が語り合い、架け橋期の教育・保育の充実を目指すものです。京都市も、教育委員会と子ども若者はぐくみ局が協力して参画しております。幼児期においては、全ての5歳児の生活・学習の基盤を保障するということで、『幼児期の終わりまでの育ってほしい姿（10の姿）』や6つのキーワードを共通言語に、幼保小の接続と保育の充実を目指します。6つのキーワードとなる『数や文字への関心』『好奇心』『粘り強さ』『生活習慣』『共同性』『自己調整』は、国の幼児教育センターで、年長児と1年生に携わられた先生や保護者にアンケートを実施し、重要だと思われた視点だと聞いております。

架け橋期の教育・保育の充実は、教育委員会だけでできるものではなく、多くの幼稚園や保育園(所)、認定こども園を所管する子ども若者はぐくみ局との連携が必要となります。言い換えれば保育者の力が必要となってくるのです。発達にふさわしい幼児教育・保育を実践する中で、保育者が大事にしてきたこと、子どもの育ちや発達の姿を、小学校や社会へ発信することが、今重要なことなのだろうと考えています。

小学校から幼稚園への異動は、私にとって一からの学び直しでした。発達にふさわしくないむずかしい事を子どもに求めたこともありましたが、主体的に遊んでいる姿を見ても、その意味が見えていなかったり、理解できなかったりしていました。小学校のように教えることがなくなった自分の存在価値がわからず、右往左往する時期を過ごし

ました。そこからだんだんと幼児の面白さや有能さ、子どもたちの姿に魅せられて、何を育てておくべきなのかを学ぶ必死の毎日を過ごしたように思います。そんな中で学んだことを綴ったのが『保育は深く面白い～「一生懸命生きる子ども」と共に～』です。連載は全部で23本、今年度は続編も10本掲載され、9月に終了しました。振り返って見ると、5歳児の姿をたくさん掲載しています。小学校から幼稚園の世界へ飛び込んだ私にとって、幼保小連携・接続は大きな課題であり、5歳児の発達に特に関心があったのだと思います。掲載された内容は全て、理屈ではなく実践してきたことばかりです。

今日は、発達の個人差が大きい幼児期には、一人一人の発達にふさわしい教育が必要であり、発達をよく知って遊びと生活の中で子どもの心を育てる事を大事にしてきたことをお伝えし、特に5歳児では皆様にも語り合っていたきたいと思います。

3. 幼児期の発達の特性に沿った教育の重要性

(1) 3歳児

幼稚園の場合、3歳児から入園してきます。まず1つ目の事例です。

保護者との別れを克服し自立へ

入園することは、保護者と離れる試練が待ち受けているということです。こうした「保護者との別れ」を克服すると、自己肯定感なのでしょうか。勝利宣言のように「もう、泣かへんで」と言った子どもに複数以上出会いました。

一人一人の心の中はさまざまで、泣く時期も、信頼関係の築き方も全く違います。あの手この手で一人一人に寄り添うのが保育の醍醐味です。その後、園生活を通して、子どもたちは少しずつ自立を始めます。その中で、約20年前の出来事を思い出します。

園庭端の非常階段の裏に、さまざまな空の植木鉢を置いていました。ある日、その中の一つ「白い」植木鉢に立派な大便が入っていました。辺りを見回すと、3歳児のA君が、きまりの悪そうな顔をしていました。私「あれ？これ、A君のうんこ？」、A君

「うん。うんこしちゃったの」、私「トイレ遠かったもんね。間に合わないと思ったのかな?」、A君「うん」、私「でも、A君、偉かったね。先生にちゃんと言えたもんね。お便所の色と同じ白い植木鉢にしたんだね。〇〇先生(担任)に言って、トイレで流してもらおうね」、A君「うん」。

私は吹き出しそうになる気持ちを抑えて担任保育者に伝え、きちんと始末してもらいました。降園時には母親に、「困ったときにどうするかを自分で考えて行動し、ちゃんと言えたことを褒めましたよ」と伝えました。

・・・中略・・・

「自分のことが自分でできる」ことは、子どもの大きな自信につながります。立つ・歩く・着替える・食べる・排せつすることの自立は、一生の最初に覚えること。死ぬまで続く、一番大事なことです。

母に対する長い介護生活の中で、「自分でできる」ことが増え、自信を獲得する子どもを支える仕事がいかに素晴らしいかを母の姿から再び教えられました。まさしく「生きる力の基礎の基礎」。これだけは、個々の発達に合わせて身に付けさせたいと願わずにはいられません。

そのため、園では身に付けやすい「環境」を工夫して整え、個々の状況に合わせて焦らず、粘り強く援助していくことが求められます。

【日本教育新聞 令和3年5月3・10日掲載】

3歳児は、先生との信頼関係を基盤にして、主体性を発揮していきます。自分の好きなことがとことんできて夢中に遊べる子は、夢中に学べる子になります。ゆったりとした時間や空間、受け止め見守る保育者の存在が、大事なことでないでしょうか。そして、信頼関係の築き方は、やり方も時期も一人一人違うということ、あの手この手で一人一人に寄り添うのが保育の醍醐味だということ、“まずは気持ちに寄り添い一緒に遊ぼう”と思って3歳児を保育していました。

便意をもよおし「どうしよう」と考え、創意工夫したA君は、立派だったと思います。その姿を、徹底的に肯定して受け止めることが大切です。そして、生活習慣の自立は人間の一生を通じて大切

なもので、家庭との連携の中で一人一人の発達に合わせて、幼児期の間に身に付けてほしいと思っています。生活習慣の自立とそれによって得られた自信は、間違いなく見える学力の基盤になると思います。

(2) 4歳児

幼稚園に異動し、初めて担任したのが2年保育の4歳児でした。1年生を担当していたときは、『みんな なかよく』と黒板の上に書いていたもので「気の合う友達と遊びを楽しむ」というめあてにビックリしました。でも、4歳児の発達を知って納得し、また、自分の気の合う友達がいて、その人を自分で見つけられるということが、どんなに大切な経験かということを、子どもたちの姿から学びました。

4歳児の事例を紹介します。

継続して子の変容を見る大切さ

幼稚園の園内研修での二つの事例です。Aちゃんが自分なりにきれいな色水を作ったり、せっけんで泡を作ったりして、夢中になってキラキラ輝きながら自分ごととして学びを展開していました。

ふと見ると、そばにいたBちゃん。入れ物も色水の色も泡も、Aちゃんと全く同じものを作っています。微妙に距離を空けて、魅力的に遊ぶAちゃんのまねをして満足そうです。2人には一緒に遊んでいる自覚はありませんが、そばで同じ遊びをしている人を感じながら楽しんでいました。

大人は「まね」を嫌がる傾向がありますが、Aちゃんの輝く「面白そう」を見つけて「まねぶ」Bちゃんの姿がほほえましかったです。

・・・中略・・・

別の園では、厳しい戦いが繰り広げられていました。大きな積み木で魅力的な船を作り、三角形の積み木をコンピューターに見立てて自慢げに遊ぶC君。途中でこの遊びを見つけたD君は、その魅力的な遊びに入りたくて重い積み木をせっせと運び、C君のコンピューター~~の~~の横に並べようとします。

4歳児が入れてほしいときの作戦の一つとして、よく使う方法です。D君には「同じことをして」「同じものを作って持って」いつの間にか仲間に入れた成功体

験があったのかもしれませんが。

でもこの時はC君に「狭くなるやん。Cたちが使ってたんや。D君のと違う」と怖い顔で叱られ、D君は返す言葉もなく意気消沈です。他児は「寄せて(入れて)」と言って、あっさり仲間に入っているのに、D君にとっては試練の日になりました。

魅力的な遊びに入りたいD君の気持ちもわかるし、勝手に入ってほしくないC君の言うこともごもっとも。このように、幼稚園ではどちらも悪くない出来事がたくさん起こります。研修では、「双方の気持ちの代弁はするだろうが、『寄せて』と言うんだよとは教えないかな。もう少し自分で言おうとする日を待ちたいね」と話し合いました。

継続的に子どもの様子を見ていける担任の醍醐味、願って待てば必ず「変容する瞬間」に出合えることを伝え、時には思い通りにならない「心の経験」も、根に持たない「しなやかな幼児期」にさせてやりたいと願います。

【日本教育新聞 令和3年6月7日掲載】

友達との出会いはさまざまです。憧れて「まねぶ」という出会い方もあります。自分で気の合う友達を見つける過程を見守り、つなぐということが保育者の大事な役割です。友達がいるということは、大きな自信になると思いますが、時にはつらいこともあります。喧嘩をしたり、仲良くなったりを繰り返すのが子どもの世界です。今の社会では、幼稚園、保育園(所)、認定こども園といった施設が、子どもの世界を守れる唯一の場所かもしれません。相手の気持ちを推し量る良い機会、自分の心の揺れを感じる経験は大切ですが、保護者にはなかなか理解してもらえないこともあるのではないのでしょうか。

しかし、忘れることができ、根に持たない、柔軟に立ち上がれる、そんな幼児の時期に、嫌な思いも経験して大きくなってほしいと思うところです。受け止める・つなぐ・向き合う、そんな丁寧な対応が大切ではないかと思えます。

(3) 5歳児

事前資料をもとに、5歳児の発達の姿についてグループで語り合う。

それぞれグループでの話が弾み、まだまだ話が続きそうな雰囲気でした。これらの記事は“5歳児の姿を小学校の先生方にも、もっとわかってほしい”という思いから書いたものです。遊びや生活の中で大切に心を育てようと思ってきたことを読み取って頂けたら嬉しいです。

発達にふさわしい遊びと「10の姿」

・・・前略・・・

京都市立の幼稚園では、よく「帽子取り」をします。これは、チーム対抗で帽子を取り合う遊びです。

最初は帽子を取られたり、負けたりすると泣いて怒ったりやめたりしますが、回を重ねるごとに、勝ったり負けたりすることを自分なりに受け止め、チームの一員として勝利のために頑張ろうという心が育ち、「チームが勝つ」ことが自分の喜びになります。

この帽子取りは、体を十分に動かすことがねらい。「取られないように身をかわし、相手の帽子を取る」という多様な体の動きを引き出す、ルールを守る、チームの仲間と協同する、言葉を掛け合って帽子を取る方法を考える、帽子の数で勝敗を決めるなど「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」が現れることが期待できる遊びです。

帽子取りは大好きなのですが、取られるのが怖くて、いつも自分の陣地にいた黄チームのA君。黄チームは積極的に戦いますが、とうとうA君だけが残りました。A君はチームの仲間に励まされ、陣地から出ました。チームの期待を一身に受け、何とか必死で素早く動き、頑張ってみたものの帽子を取られてしまいました。勝った青チームの歓声を聞きながら、A君はとぼとぼ陣地に帰ってきました。

迎えたチームの仲間や保育者に「頑張ったやん、最後まで諦めへんかったな」と言葉をかけてもらっても、悔しくて涙が出てしまいます。それでも2回戦に向けての作戦会議では、自分の意見を伝える姿が見られました。

A君の姿に焦点を当てると「豊かな感性と表現」の姿が現れることが分かります。追い込まれたA君の葛

藤、仲間にもらった勇気。時に想定外のことが起こる保育の中で、保育者の瞬時の援助と仲間の力で育つ5歳児です。

【日本教育新聞 令和3年6月21日掲載】

この事例には、発達にふさわしい遊びと、『10の姿』がたくさん出ているかと思います。グループ討議で、「個人に注目するとまた違った姿が見えてくる」と話されているグループもありました。毎日同じ遊びを繰り返していても、それぞれが全く違う心の経験をしています。同じ遊びを繰り返していても、それぞれの子どもの育ちに願いを持ち、焦点化して見ていくことが、一人一人の心の育ちを大切に見守っていくことになるのかな、と思った帽子取りの事例です。

子どもたちで遊びのルール決める

・・・前略・・・

ある日の3チームの対抗戦、黄チームは「強い人の帽子を先に取って…」という作戦を立てていました。ところが、一度取ったはずの「青チームの強い人」が、また帽子をかぶって出てきます。青チームは「チームの勝利のために強い人に帽子を譲る」という作戦を立てていたのです。

「おかしい」と思った黄チームの声が上がり、話し合いが始まります。青「強い人に代わったら勝てる。いい作戦やんか」、黄「そんなんずるい」、青「黄も赤もやったらいいやん」、黄「代わっていいのはせきの出た人とかだけ」。互いの主張がぶつかります。保育者は悩みますが「先生がルールを決める」というのは違うと思っています。

すると「帽子取りは勝ったり負けたりするから面白いんや」という意見が出て、みんなで楽しく遊ぶために「強い人に帽子を渡すのはダメ」というルールが合意の上で生まれました。自分たちで決めたルールはより自律的に守られます。帽子取りの遊びの意義を新たに知った思いでした。

このルールができるまでに約1時間。幼児ですから「もうどっちでもいいやん」「早く帽子取りしたい」というような子どもも混在する中、保育者は辛抱強く取り組み、合意にこぎ着けました。幼児教育の第一人者の先生が以前講演で「子どもの規範意識は5歳児で

大きく伸びる」とおっしゃっていたことを思い出しながら、「なるほど」と保育者と子どもたちの話し合いを楽しく聞かせてもらいました。

・・・中略・・・

5歳児の発達に合った運動遊びを安全に留意しながら行い、「心が動いてこそ体が動く」「目標が変われば動きが変わる」「チームの一体感が育つ」という幼児の発達を見極めて、心も体も一緒に育てていきたいものです。

【日本教育新聞 令和3年7月5日掲載】

これは、ある公立幼稚園の先生の保育です。“子どもってこんな風に話し合いをしてルールを変えていくんだ”“本当に面白いな”と思って見ていました。「5歳児になると規範意識が飛躍的に伸びる」と聞いたことが思い出され、納得しました。遊びのルールは子どもの姿に合わせて柔軟に変える、保育者は子どもがルールを変えていくのを見守る、そんな事例を傍で見ていて感動しました。自分たちで決めたルールは自律的に守ります。もちろん与えられて守らなければならないルールもありますが、みんなと楽しく遊ぶため、よりよく暮らすためのルールもあります。ルールは自分たちで変えたり、作ったりしていくものだという経験を幼児期に1度でもしていれば、与えられたルールに対して「本当にこれでいいのかな」「もっとこうしたらいいんじゃないかな」と考えられる子どもに育つのではないかと期待しています。

多くのことを学ぶ教育の時間

・・・前略・・・

担任は一斉に「そろそろ片づけましょうか？」と声を掛けるのですが、遊びが佳境に入っているグループは少し大目に見ます。タイミングを見計らい、担任がそのグループにもう一度声を掛けると、子どもは空気を読んで区切りをつけます。

・・・中略・・・

大前提は、子どもに見通しを持たせること、時間を十分に取ること、子どもが自分で主体的に動けるように必要な用具などが決まった場所にあること、みんなでよく遊んだこと。最後は、みんなできれいにした満足感が得られるような言葉掛けをします。クラスの日

常が本当のよく見えます。園における片づけの時間は
合間の時間ではなく、多くのことを学ぶ教育の時間な
のです。

【日本教育新聞 令和3年8月2日掲載】

片づけについて、グループ討議でも話題にされて
いました。片づけの時間は、本当にたくさんの
学びがあると思っています。生活習慣は自分自身
の片づけとも言い換えられます。遊びに区切りを
つけて片づけに向かう姿には、自己調整力の育ち
を感じます。片づけは、生活の見通しを持ち次の
活動へ移るために必要なものだということも学
びます。自分の使った物だけでなく、みんなで片
づけることで公共心も学びます。ですから、たっ
ぷりと時間を使って学んでほしいと思いますし、
ほうきや雑巾など必要な用具を揃え決まったと
ころに置いて、子どもが主体的に片づけに向える
ようにと考えていました。また、今日の遊びを褒
めてあげられる大事な時間だとも位置づけてい
ました。「こんな楽しいことしてたんや。来られ
なくて残念だった」「また明日も続きする？」な
どと言いながら、今日の遊びを認め、明日のめあ
てを共有する大事な時間ではないかと思ってい
ます。

一人一人に応じ「見届けて認める」

・・・前略・・・

リレーのチームや順番を決める時になって、Aちゃん
は「走りたい人と手をつないで走る」と主張し、B
ちゃんと手をつないで一番前に並びました。みんなも
並び始めたのですが、C君やD君が「そっちのチーム
に速い人が多い」「一緒に手をつないでは走れない」と
言う反対意見を出したのです。

「今からどんなふうに決まっていくのかな？」と思っ
ていたら、Aちゃんが激しく怒り出しました。「私の言
うことを聞いてくれないの」と保育者に訴え「みんな
のせいで言いたくなくなった。もう言わへん」「一緒に
走りたい人と手をつないでおけばいいって言ってる
の。走る時は手を離す」「もう、聞かへん。C君も私と
同じ気持ちして」と言いながら耳をふさぎ、廊下に出
ていったのです。

クラスのみんなは、ぽかんとして「どうしよう」と

いう感じになりました。手をつないでいたBちゃんが
追い掛けて「並んでいる順番でいいって言ってはるか
ら戻ろう」と伝え、Aちゃんの主張のままリレーをし
ました。Aちゃんは、なぜかリレーの後も怒っていま
したが、保育者が一対一で関わり、少しずつAちゃん
の怒りのポイントから話をずらし、気持ちを整えてい
く様子うかがえました。クラスのみんなにとっては、
これが日常なのか、淡々と帰り支度をしていました。

後の協議では、Aちゃんの姿と保育者の援助が話題
になりました。幼児が気持ちを調整する姿としては、
人に当たる・物に当たる・独りで気分を整理する・少
しずつ立ち直りが早くなる・言葉で訴えるという段階
を踏むような気がします。保育者の援助としては、人
をたたかなくなると我慢できたら褒め、一人で気分整
理をして早く戻って来られたら認めるなど、一人一人
に応じて「見届けて認める」ことが大事になってきま
す。

一方、Aちゃんに対抗する仲間の気持ちやBちゃん
のようなありがたい仲間の存在にも気付かせ、時には
担任が正面から向き合う必要性も話しました。

・・・後略・・・

【日本教育新聞 令和3年8月23日掲載】

こんなに自分の言いたいことを言って、それを
仲間があたたかく見てくれる、そんなAちゃんは
“きっと仲間たちにとって魅力的な人で、幸せな
人だなあ”と思ったりもしました。気持ちの調整
力というのは、幼児期に育ててほしい力だと思っ
ていますが、個人差があります。1年生になっ
ても、その子がどんなふうに自己調整力をつけてい
くか見守っていく必要があります。少しの変化を見
逃さず、育っていることを見届けて認めるとい
うことが大事だと思っています。

幼稚園は小1の「算数の宝庫」

何年も続く、ある幼小合同研修会に参加しました。

・・・中略・・・

1年生の授業は算数「かたち」の単元でした。さま
ざまな形の空き箱や空き缶を集めて、グループでも一
人でもいいので「好きなものをつくる」授業で、子ど
もたちは意欲的に課題に向かっていました。教科書を見
ると、円柱を紙に鉛筆で写している写真が掲載され

ていて、「七夕でスイカの飾りをつくった」と思い出しました。まさに、この単元につながる活動だったので

・・・中略・・・

よく小学校の先生から「1年生になるために何をしていますか？」と聞かれるのですが、返事に困るので

・・・後略・・・

【日本教育新聞 令和3年11月8日掲載】

小学校の算数の指導主事が、幼稚園の環境を見たとき「幼稚園は小1の算数の宝庫だ」と言われました。例えば、七夕飾りを作るときや積み木遊びなどで、いろいろな形や数に出会えたり、『集合』や『1対1対応』といったことを学んだりしているんだと思います。関心、感覚といったものを育てるために幼稚園の環境をどうとらえて、どう整えていくかによって、子どもたちの中に育つものが違い、それを見取っていくことがすごく大事なことなんだろうなあと

コマ回しと竹馬で新たな遊び創り出す

・・・前略・・・

5歳児の「ひもゴマ」は、回せるようになるには練習が必要です。回せないと面白くないので、ここは教えて、みんなで楽しめるようにしていました。慎重にひもを巻く力加減、芯が地面に着くように投げるタイミングのコツの習得、コマ回し大会などは、5歳児ならではの遊びです。

そのような遊びが発展して、子どもが面白い遊びを生み出しました。コマ回しも竹馬も熟練した3月の初めごろ、コマ回し大会が2階のテラスで始まりました。同時に、テラスに続く外廊下を竹馬で1周回る遊びもしていて、誰が一番早く1周できるかを楽しむ姿が見られました。そんな時、A君が「コマが回っている間に竹馬で戻ってくる遊びにしたら？」と言い出しました。二つの遊びが合体することに喜びを感じたからか、コマチーム対竹馬チームの遊びが始まりました。竹馬が戻ってきた時にコマが全部倒れていたら竹馬チームの勝ち、一つでも

回り続けていたらコマチームの勝ちという子どもの考えた遊びです。

この遊びには、コマを回す準備ができたかと竹馬が発できるかを見定め「よいい、スタート」の声を掛け、コマが回り続けているかどうかと竹馬のゴールを判断する高度な審判が必要になります。その役割を買って出たB君のおかげで遊びは繰り返され、何回も続きました。

コマを回すということに熟練した子どもたちが捉えた「コマが回っている間」の時間は、不思議なことにちょうど竹馬が戻って来られるギリギリの時間だったのです。「次はどっちが勝つ？」というドキドキ感がなければ、少しも面白くありません。偶然なのか、子どもの感覚なのか。この遊びを通して、コマチームは長く回るコマを探し、竹馬チームはより速く走る技を身に付けました。できることを活用して、新たな楽しみを創り出す。これが遊びです。

【日本教育新聞 令和4年1月3日掲載】

この事例では、思考力の芽生え、時間の感覚、協同性、何度も行う粘り強さといったことを感じました。子どもに「長い針が○になったら、お片付けしようね」といった言葉がけをよくしていて、このような日常は算数の素地だと思います。でも1年生で『時間』や『時計』の授業でつまずくことが割とあります。省みると、“時間の長さの感覚を意識して伝えていなかったな”と思います。「長い針が○になったら…」と言いながら、“○までにどれくらいの時間があるのかを具体的に伝えてこなかったかな”“そのような伝え方も必要なのではないかな”と思いました。

この遊びはコマが回っている間を時間として捉えて、竹馬と競争するという遊びでしたが、「どれくらいの時間やったかな」といった投げかけを自分ができたのか、と自信がありません。

計画通りでなくとも、柔軟に

・・・前略・・・

生活グループで「虫の家」を作ることになりました。最初は、設計図を書いてみたようです。そして、当日までに、その設計図を見て子どもと一緒にいろいろな素材を集め、それぞれのグループの「虫の家」に必要な材料

を用意していました。

設計図は、少し読み取りにくいものでした。しかも、作っている間は、あまり設計図を気にしていません。

時々「これをこっちに寄せて、ここにこれ置く？」というような会話はありますが、相談して進めるというよりも一人一人が自分の思いで手を加えていきます。それでも『虫族館』を作って年下の子どもたちを招待するために『グループの虫の家』を作る」という目的は、しっかり理解していて、とても意欲的に動きます。

5歳児になると、こうして目的を持って協同活動ができるのですが、計画通りでなくても個人の思いが尊重される柔軟性があり、面白いと思います。設計図はみんなで相談する楽しさを味わうための手段であって、その出来栄やその通りであるべきという縛りはないように思います。

ミミズの家には「ミミズは土の中が好きだからね」と土をたくさん入れていました。それはミミズの生態を知り、ミミズの気持ちになるからです。ある虫の家には、吸水フォームを削った箱が四つ並べてあり、餌が入っていました。「入れる虫の数だけ餌箱を置きたい」という思いは、個人で実現したことが仲間に「いいね」と尊重されます。

・・・中略・・・

自分のやりたいことを実現しつつ、仲間と共に作り、満足感を得る。このしなやかさが、幼児の良さですね。

【日本教育新聞 令和4年1月17日掲載】

この事例も園内研修で見せてもらった時のものです。協同性、自立心、自己調整力、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、豊かな感性・表現といったさまざまな『10の姿』があると思いました。

以前見た生活科の授業では、1年生が設計図を書いてその通りに作ろうとしていて、“なんだか窮屈そうだなあ”と思ったことが印象に残っています。この時の5歳児は、設計図を書いてあまり気にせず、その通りにしないといけないとも思っていない。自分のやりたいようにやって、設計図に書いてあることも新たに思いついたこともOKで、それをお互いが認め合っていました。私は、今、この幼児期の柔軟性がいつ奪われてい

くのか、いつ計画通りにやることに価値を持っていくのかということに興味があって、園内研修などに行ったときに観察しています。

5歳児の子どもの遊びや活動の中に、『10の姿』がさまざまに表れる。一人一人に焦点を当てて見れば、昨日とは違う今日の育ちが見える。見逃さず認めて、達成感や充実感、そして自信と誇りをもたせてあげたいと思っています。自分たちで遊びや生活を進める年長児には、主体性を育てる、自分で動ける環境作りが大切です。決まったところに決まったものを置く、5歳児の発達を知った上で遊びをコーディネートする、遊び仲間ではない子どもとも交流が出来るグループ作り、そして最大限に子どもの意見を取り入れる気概を持った保育者でありたいと思ってやってきました。

4. 架け橋期の充実への提言

令和4年度『学校教育の重点』（教育委員会より出されている教育の指針）に、重視する視点として「子どもの『主体性』と『社会性』を目指し、『自ら学ぶ力』と『自ら律する力』を学校・幼稚園全体の教育活動の中で高める」とあり、決して狭い意味での学力向上だけではない、ということが伝わってきます。そして学校・園づくりの5つの柱として「いのち」「よりそい」「つとめ」「ひろがり」「つながり」と書いてあります。この「つながり」の中に、校種間連携・接続により子どもを支える、ということが書いてあり、相互の連携・交流、スタートカリキュラムの実践、幼児期及び小学校期の子どもの学びと育ちの共通理解、円滑な接続、就学前施設間の連携・交流がキーワードとなっています。幼児期も小学校期も、目指しているものは一緒です。発達が違うため学びの手法が違うのです。架け橋期（5歳児と1年生）の発達はつながっており非常に似ているから、双方の良いところを取り入れ、特に環境が大きく変わる入学期は、幼保の手法も取り入れるなど、充実して楽しく安心して学べる架け橋期にしたい、というのが『幼保小の架け橋プログラム』の大きい主旨だと思っています。

保育者みんなで、保育の素晴らしさや難しさ、重要性、幼児期の発達などを伝えていきましょう、というのが、架け橋期の充実への提言です。小学校の先生方はきっと興味を持って聞いてくださるだろうと思います。そして、保育を見てもらいませんか。なかなか難しいかもしれませんが、見えにくい保育の意図、子どもへの対応の意味、自分がどんな意図をもって環境をしつらえたのか、といったことを説明しながら保育を見てもらえたら“小学校の先生の幼児期への理解がもっと深まるのではないかな”と思います。

夢中に遊ぶ子どもの姿が夢中に学ぶ子どもの姿につながります。幼児期の育ちを、小学校へつなげるのです。小学校の教育の先取りではありません。そのことは小学校の先生も理解してくださると思います。そのことが、架け橋期の教育・保育の充実にきつとつながると思っています。

今こそ、保育者が声を出して、小学校に幼児教育の大事さ、素晴らしさを伝えていきたいと思っていますところ。

5. こころねを育てる保育をしたい(事例より)

最後に、こころねを育てる保育をしたいと思ってやってきた私の実践から、二つの事例を紹介します。

「必死の涙」が友達の心動かす

多くの園では、5歳児が動物当番をします。チャボが卵を産み、温めないときは「当番の特権」で、相談後に持ち帰ることにしていました。

そんなある日、どうしても卵を持ち帰りたい当番2人の相談がまとまらず、じゃんけんをして勝った人がもらえることになりました。A君は家で「何にして食べるか」を楽しみにしていました。B君は何も言いませんが、持ち帰ることは譲りませんでした。

じゃんけんはA君の勝ち。その瞬間、B君は声を上げて泣き出したのです。いつも物静かなB君だったので、みんなびっくりしました。2人は日頃から仲良しだったので、A君が必死で慰めました。しかし、卵は譲りません。

その時、B君が「食べたらあかん。卵は^{いのち}生命や」と言ったのです。そういえば、掃除をしながら卵を耳に当てて「シューシューって言ってる」とうれしそうで

した。

私は「そうやなあ」と共感しながらも、聞き流していました。それまでも「目玉焼きにして食べました。おいしかったです」という当番の報告を、うれしそうに聞いていました。B君の気持ちを少しも受け止めていませんでした。

私はB君に「ごめんね。温めるつもりやったん？」と聞き、うなずくB君に「残念やったなあ。次の当番の時にももらえるといいね」としか言えませんでした。子どもの純粋な感性を感じ取れなかったことを申し訳なく思いました。

そのやりとりを聞いていたA君。帰るまでずっと自分のポロシャツの中に卵を入れて「ここ、卵入れてるし、触らんといてな」と訴えていました。B君の意思を引き継いだA君は家で両親に相談して温めたのですが、努力のいかなくふ化しなかったそうです。B君の必死の涙がA君の心を動かし、保護者の心を動かしました。B君も、そうしたA君の気持ちがうれしかったようです。

園では、何が正解かわからないことが起こります。「いったん母鳥が離してしまった卵はふ化しない。食べるのが得策」と判断をしていた私に、B君は「卵は生命」と教えてくれました。食べ物であることも生命であることも間違いではなく、食べることを楽しみにしていたA君の気持ちも分かります。それでも必死で「生命」を訴えたB君の気持ちが人の心を動かしたのです。

園で生き物を飼うことは手間が掛かり、近頃はやりにくいこともありますが、間違いなく子どもたちの心を育てる大切なことです。大学生になったB君は、生物の研究をしていたそうです。とてもうれしく納得しました。

【日本教育新聞 令和3年7月19日掲載】

保育者は、子どもの揺れる心に寄り添って見守り励ます存在ですが、この時の自分は、そうではなかったと反省しています。子どもの感性に気付き、寄り添える保育者であることが、信頼関係の基盤になると思います。

もう一つの事例を紹介します。

生活の中で個々の違いに気づき、学ぶ

ずいぶん昔になります。ある年の5歳児を私が担任することになり、いわゆる自閉症のA君が仲間に入ることになりました。A君は「人の集まる所に入ること」「言葉で自分の思いを伝えること」が苦手。他の子どもたちは、自分との違いに気付いていきました。

「A君はなんで一緒にお弁当食べへんのかなあ」とA君に思いを寄せ「僕、行ってくるわ」とお弁当を持ってA君の所に行くB君。「一緒に食べてきた。A君はお肉が好きで野菜が嫌いやて」とうれしそうに戻ってきます。

それから、共に生活する中で、子どもたちはA君の大切なこだわりで気づき始めました。「A君は音楽が好き」「カセットデッキの操作が上手」「ブランコとトランポリンが好き」「新幹線の本が好き」「サッカーが好き」「うるさい所では耳をふさぐ」など、自分の新しい発見を自慢げに伝えてくれました。

そんなA君がブランコに乗って「てって」と言うと、それは「押して」という意味であること、「あ・あん」と言うと「絵本のページをめくって」という意味であることに気づき、保育者や友達との関わりの中でA君が思いを伝え始めたことを子どもたち、加配のH先生、保護者の方々と共に喜び合いました。

そして3月。いよいよお別れの日が近づいてきます。親子お別れ会では生活発表会で演奏した「ミッキーマウスマーチ」を再度、演奏することにしました。A君もこの曲が好きで、大太鼓を彼なりのリズムでたたいていたからです。

「もし、A君がお別れ会の場に来ることができたら、大太鼓をたたいてもらおう」とみんなで話していました。でも、大勢の人のいる場は大の苦手。やっぱり無理かと諦めかけたとき、A君はH先生とやって来ました。C君が「はい」とバチを渡すと、一緒に演奏したのです。

保護者の方々は、よく見える所で見てくださいました。A君のお母さんは涙を流して喜んでくださいました。A君のリズムに合わせて指揮をしていた私には大きな拍手が聞こえ、DちゃんとEちゃんがA君の所に飛んでいって「上手やったなあ」とおなかと背中をさすっていました。

ビデオも写真も撮れなかったことを少し悔やみまし

たが、感動を共有できた思い出として、今も心の中にあの日の光景が鮮明に残っています。

人それぞれに違いがあり、その違いに気付くことがこんなにもうれしいことであることを、当たり前の生活の中でみんなが学び、共に育った1年でした。

【日本教育新聞 令和3年9月27日掲載】

子どもたちが、大きくなっていくこれからの人生でいろいろな人と出会い暮らす、その基盤は幼児期に育つと思います。そして、そのモデルは間違いなく保育者の姿。多様性を認め合える素地は、幼児期にできる。そのことをこの事例を通して学び、そのことをずっと頭の片隅に入れて保育をしてきたように思います。

今日はたくさん話を聞いていただいたり、皆さんで語り合っていたりして、本当にありがとうございました。今まで出会ったすべての子どもたちに感謝し、その幸せを願って、今日の話をおしまいにしたいと思います。

6. 参考文献

『保育は深く面白い～「一生懸命生きる子ども」と共に～』

日本教育新聞より

令和4年度第8回共同機構研修会
令和4年11月21日／ZOOM開催